

- (15) 書の線のもつ性質で、書線の様相とその内容をいう(前掲〔注14〕に同。P.189)。
- (16) たとえば260の「む」の最終画等は右の行(二行目)の「け」とその下に位置する「れ」の両字を貫いているかのごとく感じられる。
- (17) 一つの点画のうち、始筆と終筆の間、つまり、筆の送りの部分をいう(前掲〔注14〕に同。P.202)。
- (18) 毛筆の穂の先の部分を穂先と呼び、毛筆の最も大切な部分である(前掲〔注14〕に同。P.313)。
- (19) 一つ一つの点画の終りの部分、つまり、筆をぬいて収める部分のこと。また「収筆」ともいう(前掲〔注14〕に同。P.140)。
- (20) 筆記具にかかる圧力を筆圧といい、別に圧度ともいう。筆圧は毛筆のように、弾力性のあるものでは、その強弱は点画の上に直接太細となつて現れる(前掲〔注14〕に同。P.276)。
- (21) 運筆の速度を表す言葉。遅く、速く、ゆっくり、急にとつたように、運筆の遅速緩急は、書に筆意筆勢を表すため欠くことのできないものである(前掲〔注14〕に同。P.220)。
- (22) 脈絡ともいわれ、文字を構成している点画の一つ一つが気分的にも、形の上においてもつながりをもつことである(前掲〔注14〕に同。P.278)。
- (23) 線美を構成する要素の一つである。運筆のときのあるいは抑え、あるいは揚げることの相互関係のこと(前掲〔注14〕に同。P.343)。

第二節 雲紙本と関戸本との関係 (二)

一

雲紙本と関戸本との関係について久曾神昇氏は次のように述べられた。⁽¹⁾

関戸本のみに見えないものが五首あり、雲紙本のみに見えないものは三八首の多きに及んでいるが、それらはすべてなる誤脱と推測せられる。雲紙本は誤脱というよりも、実際には意識的に省いた為であろう。

また、堀部正二氏も「全く同系のものである」とされた上で「両本相互間に歌首の出入が存するのは、その書写の際の脱漏に基くものであらう」と述べられた。⁽²⁾

しかし、その根拠について不明瞭であることから形態・本文等の面を中心に再検討を行った。その結果、久曾神氏が指摘された四三首（五首・「三八首」）の全てが「単なる誤脱」、「脱漏」に基づくものとは考えにくいという結論に至った。以下、その考察結果、及び雲紙本と関戸本との関係に関する私見を述べる。

二

まず、詩歌句の有無に関する考察結果について述べる。

調査し得た平安時代の書写とされる諸伝本の詩歌句を集成すると八一五首に上る。そのうち、いずれかの伝本に存しない詩歌句は次の九八首である（断簡等、切り取られたもの、及びその可能性のあるものについては除外する）。

535	337	17
542	344	42
547	の次	82
549	347	90
551	348	91
556	354	92
561	363	の次 ⁽³⁾
564	369	107
584	376	109
596	の次	115
598	380	120
601	407	178
603	422	194
615	の次	215
617	434	225
618	434	237
621	の次	246
629	449	249
636	459	257
652	468	268
652	472	271
657	476	313
663	482	321
677	489	322
678	507	323
684	518	の次
699	534	330

701・703・712・714・729・735の次・736の次・738・739・740・741・742・743・744・745・756・757・760・784・785・796の次・797・803の次・804
 右の九八首のうち、脱落または追補である可能性の高い、いずれかの伝本一本のみが他本と異なる場合を除くと次のごとく
 二六首となる。詩歌番号を挙げ、詩歌句の有無を「有」・「無」とし、諸伝本の略号を括弧内に示し、有無の区別を明記する。

① 17有(雲・関・粘・伊・久・唐2・山・葦)

無(卷・戊)

② 42有(粘・伊・久・卷・下・山・多・戊・葦)

無(雲・関)

③ 215有(粘・伊・久・山・多・戊)

無(雲・関・卷・葦)

④ 268有(粘・伊・久・卷・山・戊・葦)

無(雲・関)

⑤ 313有(雲・粘・伊・久・山・戊・葦)

無(関・卷・和1)

⑥ 321有(行大・粘・伊・久・唐2・卷・卷・山・多・戊・葦)

無(雲・関)

⑦ 322有(行大・雲・関・久・卷・和1・山・多・戊・葦)

無(粘・伊)

⑧ 354有(粘・伊・久・山・戊)

無(雲・関・卷・葦)

⑨ 380 有(粘・伊・久・卷・山・戌・葦)

無(雲・関)

⑩ 407 有(雲・関・粘・法・伊・久・益・山・戌・葦)

無(卷・太)

⑪ 422 の次 有(益・山)

無(雲・関・粘・伊・久・卷・下・戌・葦)

⑫ 434 有(雲・関・粘・久・卷・山・戌・葦)

無(伊・太・大内)

⑬ 434 の次 有(伊・久・太・大内・山)

無(雲・関・粘・卷・戌・葦)

⑭ 449 有(粘・近・伊・久・卷・太・山・多・戌・葦)

無(雲・関)

⑮ 534 有(粘・近・伊・卷・久・太・下・山)

無(雲・関・戌・葦)

⑯ 535 有(関・粘・近・法・伊・久・太・下・山・戌・葦)

無(雲・卷)

⑰ 564 有(粘・近・伊・久・卷・山・多・戌・葦)

無(雲・関)

⑱ 603 有(粘・近・伊・久・大内・山)

無(雲・関・卷・戌・葦)

①9 617有(雲・関・粘・法・伊・久・唐1・下・山・戌・葦)

無(安・卷)

②0 621有(雲・関・粘・伊・久・山・戌・葦)

無(安・卷)

②1 652の次有(安・卷・定大)

無(雲・関・粘・近・伊・久・益・山・戌・葦)

②2 712有(粘・近・伊・久・安・卷・山・戌・葦)

無(雲・関)

②3 714有(粘・近・伊・久・安・卷・山・戌・葦)

無(雲・関)

②4 729有(粘・近・伊・久・安・卷・太・山・戌・葦)

無(雲・関)

②5 784有(粘・近・伊・久・安・卷・太・益・山・戌・葦)

無(雲・関)

②6 797有(粘・近・伊・久・益・山)

無(雲・関・安・卷・太・戌・葦)

右のうち、雲紙本と関戸本とが相違するのは⑤・⑩のみである。他本に対して二本のみが一致している事象数については、雲紙本・関戸本の一〇首(②・④・⑥・⑨・⑭・⑰・⑳・㉓・㉔・㉕)が諸伝本中、最多であり、また、それらはいずれも

両本に無いことが確認される。

前述した通り、両本間に見られる相違箇所については雲紙本に存しないケースが三八首（うち、三六首は雲紙本にのみ無い）、関戸本に存しないケースが五首（うち、三首は関戸本にのみ無い）であるが、それらは右掲⑤・⑩を除くと両本それぞれの独自事象である。

その四三首（三八首、五首）について検討を行った結果、両本間には共通的要素が看取された。

その番号等を、A・雲紙本に無い（関戸本に有）句（A）と略称する、B・関戸本に無い（雲紙本に有）句（B）と略称するに分けて全て挙げる。

事例の各番号の下には『日本古典文学大系』⁴73（以下、『大系』と略称）・『新潮日本古典集成』⁵・『角川ソフィア文庫 和漢朗詠集』⁶を参照し、当該作品の作者名も記す。その下の括弧内には『大系』から一部記述を引用する。その記述の通り、出典では一連の作品でありながら、『和漢朗詠集』中、分けて（詩歌番号を異にして）配されている佳句も存する。それに該当する場合は各項目の冒頭（各番号の上）に*印を付す。

A・雲紙本、無（関戸本、有）

(1) 82 紀長谷雄

* (2) 91 菅原文時「91は92と「同題同韻同作者」

(3) 107 島田忠臣

* (4) 120 源英明「120は121」の下句と合わせて「絶となる」

(5) 178 紀在昌

* (6) 225 島田忠臣「225は226と「合わせて一絶をなす」

(7) 237 紀齊名

- * (8) 246 菅原淳茂 [246は245・247・248と「合して一律を成す」]
- * (9) 330 橘直幹 [331は「330と同じ詩合の左」]
- (10) 347 藤原篤茂
- (11) 459 大江朝綱
- (12) 468 惟喬親王
- (13) 472 元積
- (14) 476 橘在列
- * (15) 482 白居易 [482は254・455等と合わせて二作品]
- (16) 489 慶滋保胤
- (17) 507 橘直幹
- (18) 518 平佐幹
- (19) 535 源英明
- (20) 542 (作者不明)
- * (21) 547 菅原文時 [547は546・548・549と合わせて二首の七言律詩]
- (22) 551 紀長谷雄
- (23) 556 杜荀鶴
- * (24) 561 都良香 [566は「561の後聯」]
- (25) 584 高丘相如
- (26) 596 紀齊名

(27) 598 慶滋保胤

(28) 615 (作者不明)

(29) 618 白居易「554と一連の詩からの摘句」⁸⁾

(30) 629 藤原篤茂

(31) 636 菅原庶幾

(32) 657 楊衡

(33) 663 藤原国風

(34) 677 大江朝綱

(35) 684 許渾

* (36) 703 大江朝綱「703は700・701・702と合わせて「七言律詩一篇」

(37) 756 白居易

(38) 760 惟良春道

B・関戸本、無(雲紙本、有)

① 313 源順

* ② 363 菅原文時「363は364と「連続して一首の七絶」。

③ 369 紀長谷雄

* ④ 549 菅原文時「549は546・547・548と合わせて「一首の七言律詩」。

* ⑤ 701 大江朝綱「701は700・702・703と合わせて「七言律詩一篇」。

右に挙げた事例について、明白なことは和歌が一首も無いということである。また、右の作者名に拠ると、「A」では三〇首、

「B」ではその全全て（五首）が邦人であり、相対的に見て「A」・「B」における邦人数の占める割合は大きい。

また、「A」に二首以上が見られる作者が「B」にも存する。菅原文時（「A」(2)・(21)、「B」②・④）・大江朝綱（「A」(11)・(34)・(36)、「B」⑤）・紀長谷雄（「A」(1)・(22)、「B」③）であるが、その三名は『和漢朗詠集』全般に亘って頻出度の高い作者である。

唐人についても頻出度の高い作者である白居易（「A」(15)・(29)・(37)）・元稹（「A」(13)）・杜荀鶴（「A」(23)）・許渾（「A」(35)）が見られる。¹⁰⁾

また、*印を付した作品は「A」では九首、「B」では三首が存する。そのことに加え、そのうちの547（「A」〈雲紙本〉(21)）と549（「B」〈関戸本〉④）、及び703（「A」〈雲紙本〉(36)）と701（「B」〈関戸本〉⑤）とは出典においてそれぞれ一連のものであることも確認された。

次に、排列について述べる。

調査し得た諸伝本間に見られる排列上の異同箇所（全て）の詩歌番号を挙げる（諸伝本の略号を括弧内に示す）と次の通りである。当該詩歌句が無い場合（①・⑪・⑮・⑱・⑳・㉓・㉔・㉕）を除くと両本は全てにおいて一致しており、また、他本に対して雲紙本・関戸本の二本のみが一致する事象（⑥）も確認される。

① 90・91無・92〔雲〕

90・91・92〔関〕・粘・伊・久・卷・山・戊

91・92・90（多）

90無・91・92（葦）

② 110・111〔雲〕・関・粘・伊・久・卷・山・戊

111・110（唐2・葦）

- ③ 137 ∽ 143 · 133 ∽ 136 [卷上 · 春部] [躑躅 · 「款冬」 · 「藤」] [雲 · 閔 · 卷 · 山 · 戊 · 葦]
- 133 ∽ 143 [卷上 · 春部] [藤] · 「躑躅」 · 「款冬」 (粘 · 伊)
- ④ 188 · 189 [雲 · 閔 · 粘 · 伊 · 久 · 卷 · 下 · 山 · 戊 · 葦]
- 189 · 188 (大内)
- ⑤ 195 · 196 [雲 · 閔 · 粘 · 久 · 卷 · 下 · 山 · 多 · 戊 · 葦]
- 196 · 195 (伊)
- ⑥ 202 · 201 [雲 · 閔]
- 201 · 202 (粘 · 伊 · 久 · 卷 · 山 · 戊 · 葦)
- ⑦ 226 · 227 [雲 · 閔 · 粘 · 伊 · 卷 · 山 · 戊 · 葦]
- 227 · 226 (久)
- ⑧ 268 無 · 269 · 270 · 271 [雲 · 閔]
- 268 · 269 · 270 · 271 (粘 · 伊 · 戊 · 葦)
- 268 · 269 · 270 · 271 無 (卷)
- 268 · 270 · 271 · 269 (久)
- 269 · 270 · 271 · 268 (山)
- ⑨ 273 · 272 [雲 · 閔 · 久 · 卷 · 唐 2 · 山 · 戊 · 葦]
- 272 · 273 (粘 · 伊 · 多)
- ⑩ 309 · 308 [雲 · 閔 · 久 · 山 · 戊 · 葦]
- 308 · 309 (粘 · 伊)

- 308 無 · 309 (卷)
- ⑪ 313 · 312 (雲 · 葦)
- 312 · 313 無 (閔 · 卷 · 和 1)
- 312 · 313 (粘 · 伊 · 久 · 山 · 戊)
- ⑫ 368 · 367 (雲 · 閔 · 伊 · 久 · 卷 · 山 · 戊 · 葦)
- 367 · 368 (粘)
- ⑬ 405 · 406 (雲 · 閔 · 粘 · 法 · 伊 · 久 · 卷 · 太 · 山 · 戊 · 葦)
- 406 · 405 (益)
- ⑭ 465 · 466 (雲 · 閔 · 粘 · 近 · 伊 · 久 · 卷 · 太 · 戊 · 葦)
- 466 · 465 (山)
- ⑮ 472 無 · 473 (雲)
- 472 · 473 (閔 · 粘 · 近 · 伊 · 久 · 卷 · 太 · 下 · 戊 · 葦)
- 473 · 472 (山)
- ⑯ 483 · 484 · 485 (雲 · 閔 · 粘 · 近 · 伊 · 久 · 太 · 益 · 山 · 戊 · 葦)
- 484 · 485 · 483 (卷)
- ⑰ 511 · 512 · 513 (雲 · 閔 · 粘 · 近 · 伊 · 久 · 山 · 戊 · 葦)
- 512 · 513 · 511 (卷)
- ⑱ 546 · 547 無 · 548 · 549 · 550 (雲)
- 546 · 547 · 548 · 549 無 · 550 (閔)

- 656 · 655 (久)
- ②4 655 · 656 (雲・関・粘・近・伊・卷・山・戊・葦)
- 625 · 628 · 629 (久)
- 625 · 626 · 627 · 628 · 629 (関・粘・近・伊・卷・山・戊・葦)
- ②3 625 · 626 · 627 · 628 · 629 無(雲)
- 616 · 617 · 618 と 619 後部の合成 · 620 · 621 · 622 · 619 前部 (山)
- 618 · 619 · 620 · 621 · 616 · 617 (久)
- 616 · 617 無 · 618 · 619 · 620 · 621 無 · 622 (安・卷)
- 616 · 617 · 618 · 619 · 620 · 621 · 622 (関・粘・伊・戊・葦)
- ②2 616 · 617 · 618 無 · 619 · 620 · 621 · 622 (雲)
- 603 · 602 (大内)
- 602 · 603 (粘・近・伊・久・山)
- ②1 602 · 603 無 (雲・関・卷・戊・葦)
- 573 · 576 · 574 · 575 (久)
- ②0 573 · 574 · 575 · 576 (雲・関・粘・近・伊・卷・山・戊・葦)
- 560 · 557 · 558 · 559 (久)
- ①9 557 · 558 · 559 · 560 (雲・関・粘・近・伊・卷・山・戊・葦)
- 550 · 546 · 547 · 548 · 549 (卷)
- 546 · 547 · 548 · 549 · 550 (雲切・粘・近・伊・久・山・戊・葦)

②5 671・672 (雲・関) 粘・近・伊・安・卷・山・多・戊・葦

672・671 (久)

②6 686・687 (雲・関) 粘・近・伊・安・卷・太・多・戊・葦

687・686 (久)

②7 702・701 (雲)

701無・702 (関)

701・702 (粘・近・伊・久・安・卷・太・山・戊・葦)

②8 726・727・728 (雲・関) 粘・近・伊・安・卷・山・戊・葦

728・726・727 (久)

②9 729無・730 (雲・関)

729・730 (粘・近・伊・久・安・卷・太・戊・葦)

730・729 (山)

③0 741・742・743・744 (雲・関) 粘・近・伊・久・安・卷・太・戊

741・742・744 (山)

741・743・742・744 (多)

741無・742無・743無・744無 (葦)

③1 746・747 (雲・関) 粘・近・伊・安・卷・太・山・俊和・戊・葦

747・746 (久)

③2 754・755・756無・757 (雲)

754・755・756・757(園・粘・近・伊・安・太・山・戊・葦)

754・755・756・767無(巻)

755・756・754・757(久)

右のうち、雲紙本に無いのは六か所(①・⑮・⑱・⑳・㉓・㉔)、関戸本に無いのは三か所(⑪・⑱・㉔)である。⑪では、313が関戸本に無く、諸伝本の排列が312・313であるのに対して、雲紙本・葦手本では313・312の順である。また、㉔では、関戸本には701が無く、諸伝本の排列が701・702であるのに対して、雲紙本のみが702・701の順である。関戸本に無い二首(313・701)と、その前後の句(312・702)において、雲紙本の排列は他本の排列と相違している(雲紙本の排列は313・312、702・701である)。

また、⑱からは547が雲紙本に無く、549が関戸本に無いことが確認された(547と549とが出典では一連の作品であるという点は前項において指摘した通りである)。

以上、諸伝本間における詩歌句の有無に関する異同箇所について調査した結果、雲紙本と関戸本のみが無いのは一〇首もあり、他の諸伝本間に見られる一致数(粘葉本と伊予切(一首)、卷子本と太田切(一首)、雲紙本と卷子本(二首)、安宅切と卷子本(二首))に比して著しく多いものであった。

しかし、両本は句数においては相違していた。雲紙本に無いのは三八首、関戸本に無いのは五首であり、それらを検討してみると両本間には以下挙げるいくつかの共通要素が看取された。

- ・和歌は一首も見当たらない。
- ・邦人によると思われる作品が多い。
- ・雲紙本の三八首の中に二首以上が見られる作者(三名)の作品が関戸本の五首のうちの四首を占める。
- ・『和漢朗詠集』全般に亘って頻出度が高いとされる作者による作品が目立つ。
- ・『和漢朗詠集』中、他の箇所に配されている詩句と出典において一連のものであった可能性のある詩句が在する(雲紙本で

は七首、関戸本では一首。さらに、当該詩句間にも同様なケースが認められる(547〔雲紙本〕と549〔関戸本〕、703〔雲紙本〕と701〔関戸本〕とは出典を同じくする)。

一方、排列においても両本では全てが一致していた。また、諸伝本中、雲紙本の排列が他本と相違している詩句(313・701)が関戸本に存しないことも注目された。

三

個々の本文を考察した結果について述べる。

和歌は一句、漢詩は一文字を単位として異同調査を全本文に亘って行った。その際、異体字・略字等について、また、和歌では漢字と仮名との違い、仮名遣いの違い等について異同とは見做さないこととした。後人による改竄かと思しき文字、剥落等のため判読不可能な文字、同筆と認められない文字等については原則、対象外とした。

その結果が次の【諸伝本間の本文異同調査表】であり、斜線の左は和歌、右は漢詩を示し、上と右に記した略号の結ばれた欄をそれぞれ三段に分け、上段にはその二本間における対照箇所数を、中段には同文箇所数を、下段にはその対照箇所数に対する同文箇所数の割合を%で表した。

同表に拠ると、雲紙本と関戸本との同文箇所数について、和歌は二六五か所(九三・三%)、漢詩は七〇五か所(九二・九%)であり、零本・断簡等を除くと、雲紙本と関戸本との関係は、粘葉本と伊予切との関係に次いで近いことが知られる。ただし、二本間においてのみ同文である箇所数は漢詩においては諸伝本中、雲紙本と関戸本とが最多といえる。

以下、その事例をいくつか挙げる。

まず、雲紙本の本文を載せ、関戸本との同文箇所を傍線を付す。括弧内にはその本文を有する伝本の略号を挙げ、諸伝本間における異同も示す。各項目の末尾には他文献の本文も載せる。

葦手本	戊辰切	山城切	卷子本	久松切	伊予切	法輪寺切	近衛本	粘葉本	関戸本	雲紙本	歌 詩
283	279	278	282	277	283	36	103	281	284		雲紙本
201	184	192	212	208	191	26	67	184	265		
71.0	65.9	69.1	75.2	75.1	67.5	72.2	65.0	65.5	93.3		%
283	279	278	282	277	283	36	103	281		759	関戸本
202	182	197	211	205	189	28	65	182		705	
71.4	65.2	71.0	74.8	74.0	66.8	77.8	63.1	64.8		92.9	%
280	276	277	279	276	283	34	103		827	763	粘葉本
184	179	148	183	220	266	33	94		585	559	
65.7	64.9	53.4	65.6	79.7	94.0	97.1	91.3		70.7	73.3	%
102	103	101	103	105	105	32		459	450	414	近衛本
69	72	60	60	86	94	31		432	315	313	
67.6	69.9	59.4	58.3	81.9	89.5	96.9		94.1	70.0	75.6	%
36	36	35	36	36	36			131	152	149	法輪寺切
27	24	21	24	29	33			121	146	109	
75.0	66.7	60.0	66.7	80.6	91.7			92.4	96.1	73.2	%
282	278	279	281	278		152	459	842	827	763	伊予切
192	183	155	194	227		149	428	809	583	559	
68.1	65.8	55.6	69.0	81.7		98.0	93.2	96.1	70.5	73.3	%
276	272	273	275		835	151	459	835	822	754	久松切
208	193	175	201		686	125	379	699	585	556	
75.4	71.0	64.1	73.1		82.2	82.8	82.6	83.7	71.2	73.7	%
281	277	276		825	830	147	452	830	817	751	卷子本
200	187	170		526	530	86	285	532	455	430	
71.2	67.5	61.6		63.8	63.9	58.5	63.1	64.1	55.7	57.3	%
277	273		809	814	819	151	444	819	806	738	山城切
168	156		508	657	653	121	344	656	603	565	
60.6	57.1		62.8	80.7	79.7	80.1	77.5	80.1	74.8	76.6	%
278		813	824	829	834	149	458	834	823	755	戊辰切
205		669	561	696	714	122	388	716	609	583	
73.7		82.3	68.1	84.0	85.6	81.9	84.7	85.9	74.0	77.2	%
	813	796	807	812	817	145	439	817	807	740	葦手本
	682	598	515	625	631	121	350	633	561	534	
	83.9	75.1	63.8	77.0	77.2	83.4	79.7	77.5	69.5	72.2	%

【諸伝本間の本文異同調査表】

(1) 186 螢火乱飛秋近辰星早没夜始長(雲)

(同) 始(関)

(異) 初(粘・伊・久・卷・大内・山・多・戊・葦)

『全唐詩』元稹二下「夜座」。当該箇所、「初」。『和漢朗詠集』諸伝本では出典と同じく「初」であり、雲紙本・関戸本の「始」は同訓に因り生じたと思われる。

(2) 217 詞託微波且雖遣心期片月欲為媒(雲)

(同) 且雖(関)

(異) 雖且(粘・伊・久・卷・下・山・多・戊・葦)

『和漢朗詠集私注』(以下、『私注』と略称)、当該箇所、「雖且」。本来、「雖且」とあるべきであり雲紙本・関戸本では文字が転倒している。

(3) 263 先三遲兮吹其花如曉星之転河漢引十分 | 蕩其彩疑秋雪之廻洛川(雲)

(同) ナシ(関)

(異) 兮(粘・伊・久・卷・大内・山・葦)

而(戊)

『本朝文粹』卷十一「九日侍宴觀賜群臣菊花應製 紀納言」。当該箇所、「兮」。雲紙本・関戸本では「兮」を脱している。

(4) 457 胡雁一声秋破商客之夢巴猿三叫曉濕行人之裳(雲)

(同) 濕(関)

(異) 霑(粘・近・伊・久・卷・太・大内・山・多・戊・葦)

『本朝文粹』卷三「辨山水 文章得業生正六位上大江朝臣澄明対」。当該箇所、「霑」。「濕」は「霑」と類義であることから、

雲紙本・関戸本は転化したと見られる。

(5) 481 臨風杪秋樹对酒長年醉貌如紅葉雖紅不是春(雲)

(同) 紅(関)

(異) 霜(行大・粘・近・伊・久・卷・太・益・定大・山・戊・葦)

『白氏文集』卷十七「醉中对紅葉」。異同箇所、「霜」。「霜葉」は霜で赤くなつた葉のことであり、雲紙本・関戸本では「紅葉」と書されている。

(6) 668 江都之好勁捷「七尺屏風其徒高淮南之求神仙也一旦乘雲而何益(雲)

(異) ナシ(関)

(同) 也(粘・近・伊・久・卷・太・山・多・戊・葦)

『本朝文粹』卷十「初冬於栖霞寺同賦霜葉滿林紅応李部大王教 源順」。当該箇所、「也」。異同箇所は粘葉本以下の諸伝本のごとく雲紙本・関戸本では脱字といえる。

(7) 780 行宮見月傷心色「雨夜聞猿断腸声(雲)

(同) 雨夜(関)

(異) 夜雨(粘・近・法・伊・久・安・卷・太・益・山・戊・葦)

『白氏文集』卷十二「長恨歌」。当該箇所、「夜雨」。雲紙本・関戸本の本文「雨夜」は転倒に因ると考えられる。

他本に対して雲紙本と関戸本の二本のみが同文である場合、二本と諸伝本との間に見られる異同の主な要因には、音・訓・字義が類していること、及び文字の転倒・脱漏等が挙げられる。

次に、雲紙本と関戸本との間に見られる異同に関する事例を挙げる。

詩句等については、对照箇所(七五九か所)のうち、雲紙本と関戸本には五四か所の異同がみられ、そのうち、誤脱等と

思しき事例には四五か所が確認された(うち、雲紙本、関戸本のうちのいずれかが独自本文であるのは一八か所である)。

当該事例(四五か所)は次の①・②・③・④に大別される。事例を一例ずつ挙げる。

①脱字と思しきもの(二三か所)。

■ 87 白片落梅浮澗水黄梢新柳出城墻(雲)

(同) 柳(粘・伊・久・卷・山・多・戊・葦)

(異) ナシ(関)

『白氏文集』卷十八「春至」。当該箇所、「柳」。関戸本では一文字「柳」を脱している。

②衍字と思しきもの(二か所)。

■ 464 随分管絃還自足等閑篇詠被人知(雲)

(同) 閑(粘・近・伊・久・卷・太・山・戊・葦)

(異) 閑閑(関)

『白氏文集』卷二十四「重答劉和州」。当該箇所、「閑」。関戸本「閑閑」は衍字である。

③文字の転倒かと思しきもの(六か所)。

■ 774 嘉辰令月歡無極万歳千秋楽未央(雲)

(同) 秋楽(粘・近・伊・久・安・卷・太・山・戊・葦)

(異) 楽秋(関)

『私注』、当該箇所、「秋楽」。関戸本の当該箇所「楽秋」は「秋楽」が転倒したものである。

④字形の類似に因る誤写かと思しきもの(一四か所)。

■ 318 尋陽江色潮添滿彭蠡秋声雁引来(雲)

(同)潮(粘・伊・下・散・戊・葦)

(異)湖(行大・関・久・唐・卷・山)

『全唐詩』劉禹錫十二。当該箇所、「潮」。関戸本等には「湖」とあるが、行書等では「潮」と字形が類似しており、それに因る誤写かと思われる。

和歌については、雲紙本と関戸本には対照箇所(二八四か所)のうち、異同は一九か所(うち、雲紙本、関戸本のいずれかが独自本文であるのは一四か所)が存し、その殆どが誤脱・衍字等であると思われる。

たとえば、以下のごとくである。雲紙本の本文を挙げ、以下、異同を示す。

◆789 いまこむといひてわかれしはかりになかつきのありあけのつきをまちいてつるかな(雲)

(異) いひしはかりに(関・粘・近・法・伊・久・卷・太・益・山・戊・葦)

いひしはかり(安)

両本間における異同の要因が如上のことに該当しないとされるものは九か所のみであり、そのうちの七か所については雲紙本、または関戸本が諸伝本と同文であった。

以上、本文の面においても雲紙本と関戸本とは近い関係にあることが改めて確認された。殊に、漢詩においては二本間においてのみ同文である箇所数が諸伝本中、最多といえる。しかし、その一方、両本間には誤脱等が少なからず存していた。

四

次に、注記について述べる。本書(第一章第三節)中、指摘する通り、雲紙本には別筆が随所に確認されるが、それらについては考察の対象外とする。

まず、雲紙本と関戸本との間に異同がある場合について検討した結果について述べる。雲紙本の注記を挙げ、以下、異同

を示す。

両本のうちのいずれか一方が誤りであると見做し得るのは次の二か所のみである。

◇63後漢書(雲・粘・近・伊・久・安・下・山・多・戊・葦)

漢書(関)

ナシ(定大)

◇789いせ(雲)

素性(関・粘・法・伊・久・安・益・山・戊・葦)

ナシ(近・太)

その他については、両本間には一〇二か所もの異同が存していることが認められ、それらは以下のごとく大別される。事例についてはそれぞれ一例ずつ挙げる。

◆表記等による相違(三〇か所)。

92菅三品(雲・粘・伊・久・山・葦)

菅三(関)

菅三 大庾嶺(多)

ナシ(戊)

◆雲紙本・関戸本のうちのいずれか一方に記載が無い(三五か所)。

40ナシ(雲・伊)

菅(関・粘・戊・葦)

花時天似□ 菅(山)

花時天似醉 菅丞相(久)

◆雲紙本・関戸本のうちのいずれか一方には題詞等・作者名が書されており、もう一方には作者名のみが書されている(三五か所)。

122相規 花少鳥亦稀(雲)

相規(関・粘・伊・戊・葦)

花少鳥亦稀 相規(久)

花口亦稀 保胤(山)

◆雲紙本・関戸本のうちのいずれか一方には題詞・作者名が書されており、もう一方には題詞のみが書されている(三か所)。

465夜笛(雲)

夜笛章孝標(関・伊・久・太・山)

章孝標(粘)

ナシ(近・戊・葦)

注記について、雲紙本と関戸本との間に見られる異同のうち、実質的と見做し得るのは僅か二か所のみであった。それと同時に両本間における異同箇所が一〇二か所に上るといっても確認された。

五

雲紙本と関戸本との関係について、形態・本文等の面から再検討を行った。その結果、他の諸伝本に対して雲紙本と関戸本の二本にのみ無い箇所数がいずれの二本間における場合よりも多いということが確認された。排列にも両本間の相違は見られず、本文・注記(題詞・作者名等)の面においても両本の一致率は高く、また、両本が特異な事例を共有していること

も改めて確認された。

その一方、両本間には相違も認められた。最も顕著であるのは句数のことである。「雲紙本に無い（関戸本にはある）句」は三八首、「関戸本に無い（雲紙本にはある）句」は五首であるが、それらについて検討してみると、両本間には以下述べる通り、いくつかの共通要素が看取された。

そこでは和歌は見当たらず、邦人による作品が多く、また、その関戸本の当該句（五首）のうちの四首それぞれの作者とされる三名は雲紙本の当該句（三八首）の作者の中に存する。

『和漢朗詠集』全般に亘って頻出度が高い作者による作品が当該句では目立ち、また、当該句と、『和漢朗詠集』中、他の箇所配されている詩句とが出典において一連のものであった可能性のあるものが確認された（雲紙本では七首、関戸本では一首）。さらに、当該詩句間にも、出典において一連のものであった可能性のある詩句の共有が認められた（547〈雲紙本〉と549〈関戸本〉、703〈雲紙本〉と701〈関戸本〉が挙げられる）。

関戸本に無い二首（313・701）について、雲紙本では当該句の前後（312・702）の排列が諸伝本とそれぞれ相違していた。想像の域を出していないものの、詩歌句の有無と排列の揺れとは相関関係を持つ側面があるように感じられる。その重なりがわずかに二首であるとはいえ、関戸本では対象となる詩句が五首のみであることから、二首という数は重視されるべきではなからうか。

両本が極めて近い関係にあり、かつ、同筆であるという事実を前提とするならば以上のことは雲紙本と関戸本との間に親本レベルにおいて何らかの接触がなければ生じ得ないと考えられる。

本文・注記において、両本は極めて近い関係にある。しかし、両本間には少なからず異同も存していた。両本では詩歌句数が一致しておらず、関戸本に無いものを雲紙本が有しており、その一方、雲紙本に無いものを関戸本が有している場合もある。そのようなことから雲紙本と関戸本との関係は、いずれかを基としてそのまま写し取られたのではなく、両本の親本、

あるいは両本に極めて近い関係にある伝本に（出典等も考慮の上）、意図的削除、付加等がなされた結果、生成されたと見てよいのではなからうか。

雲紙本、関戸本ともに調度品としての性格が強い。外的な要因（例えば料紙の分量のことや調度品としての用途等）により詩歌句数の調整が図られたことも考えられる。

以上述べた推測が事実であるならば、両本の書写年代のことも考え合わせると、当該詩句の出典等、その詳細を当時知り得ていた『和漢朗詠集』の撰者である公任、または、公任に近い関係にある人物がそこに関わっていた可能性が高いと考えられる。

注

- (1) 久曾神昇氏「和漢朗詠集の本文批評」(『仮名古筆の内容的研究』〔昭和55年 ひとく書房〕P 195・196)
- (2) 堀部正二氏編著『校異和漢朗詠集』〔昭和56年 大学堂書店〕P 21
- (3) 記述中「の次」とは、『新編国歌大観』に無く、無番号。当該番号を有する詩歌句の次（ここでは92の次）に位置することを意味する。本表記により当該詩歌句の位置を示す。以下、同。
- (4) 川口久雄氏校注『日本古典文学大系』73〔昭和40年 岩波書店〕P 202
- (5) 大曾根章介・堀内秀晃両氏校注『新潮日本古典集成 和漢朗詠集』〔平成5年 新潮社〕
- (6) 三木雅博氏訳注『和漢朗詠集』〔平成25年 角川学芸出版〕
- (7) 『大系』(前掲〔注4〕)に同。P 104では「白」と注するのは誤り」とされ、『私注』にも「田達音」と注されている。
- (8) 前掲〔注6〕に同。P 307
- (9) 柿村重松氏著『和漢朗詠集考證』〔昭和48年 芸林舎〕P 18・20に拠ると、『和漢朗詠集』中、作品の入集数は唐人…二三三首、邦人…

三六二首である。

(10) 柿村重松氏に拠ると、『和漢朗詠集』中、作品が多く入集されている邦人には「菅原文時」・「菅原道真」・「大江朝綱」・「紀長谷雄」等が挙げられる。また、唐人では「白居易」が圧倒的に多く(一三七首)、その他、「元稹」(二一首)・「許渾」(一〇首)等も挙げられる(前掲〔注9〕に同)。上述した三名の邦人「菅原文時」・「大江朝綱」・「紀長谷雄」、及び「白居易」・「元稹」・「許渾」が当該詩句中に存することになるが、そのことも偶然とは思えない。

(11) なお、「排列の揺れ」と「詩歌句の有無」との相関性については本書中(第三章)においても指摘する。

第三節 雲紙本に見られる別筆

一

雲紙本には「鎌倉時代の筆とらしい」^①別筆が随所に見られる。本文中、刃物による削消、及び補筆・傍書等が存する。目録・注記に書き足された所もある。

前節中、雲紙本と関戸本との関係^②について考察を行った際、それらの箇所は考察の対象外とした。よって、本節ではその雲紙本に見られる別筆を取り上げ、考察を行った結果について述べる。本文における削消・補筆がなされたと思われる箇所（以下、略号を「雲別」とする）、及び傍書（以下、略号を「雲傍」とする）について明らかにし、雲紙本本来の書写者による文字の姿を探り、検討を加える。

二

以下、当該箇所について指摘する。その際、雲紙本の本文（全文）を挙げ、当該箇所に傍線を付し、諸伝本間の異同を示す。括弧（ ）内には、『校異和漢朗詠集』^③から以下取り上げる別筆に関する同書著者（堀部氏）の記述を引用した。

以下指摘する事例の中には堀部氏が雲紙本本来の書写者の筆と判断されている箇所もある。その場合、「（堀部氏、「」を別筆とせず）」と付記した。削消・補筆が施されたと思われる箇所のうち、雲紙本の書写者が書いたと思われる文字（以下、原姿と仮称する）の痕跡が認められる場合は*を印し、その形状を模写した。一文字内の部分的な削消・補筆かと思われる箇所も存する。その場合は※を印し、削消が行なわれていないと思われる部分を明記した。

■ 22 着野展敷紅錦繡當天遊織碧羅綾

① 織（雲別・粘・伊・久・唐・2・卷・益・山・戊・葦）